早稲田大学大学院文学研究科紀要 第70輯（2025年3月）
Bulletin of the Graduate School of Letters, Arts and Sciences of Waseda University Vol.70 (Mar.2025)

『源氏物語』において「絵」と関連づけられる庭園

――日中の「絵」に関わる表現の検討から――

楊　卓婧

はじめに

平安仮名文学においては、「絵に描きたるやう」、「絵に描かまほし」などのように、絵に見立てることと関連する常套的な表現が人物や自然などへの賛美として散見される。これらの表現は、当時の人々がどのような美を追求したり、どのような物事を「絵」と関連づけさせたりしていたかを示す貴重な情報といえるであろう。

表1では、平安時代の主要な仮名作品（和歌・物語文学・日記文学・歴史物語など）において、「絵」と関連づけられる物事がどのようにみられるのかをまとめている。(1) なお、韻文作品（歌集等）を先に掲げたが、『久安百首』の一例しか見いだされなかった。(2) この**表1**に示されている通り、全体の用例数から言うと、行事・人事などに関わる人物（五十八例）のあり様を示す例などが、庭園・自然（十六例）の描写より遥かに上回っている。その一方で、『源氏物語』

表１　平安の仮名文学における「絵」と関連づけられる物事

庭園	自然	庭園に居る人々	行事・人事関係		総数	
			人物など	車・食器・火焚屋		
	1				1	久安百集
	1		1		2	蜻蛉日記
			1		1	うつほ物語
			5	2	7	枕草子
6	1	2	4		13	源氏物語
			6		6	紫式部日記
1			23	1	25	栄花物語
1		3	3		7	浜松中納言物語
	2				2	更級日記
		1	4		5	夜の寝覚
	1		3		4	狭衣物語
			1		1	讃岐典侍日記
			2		2	大鏡
1			1		2	今鏡
1			4		5	とりかへばや物語
10	6	6	58	3	83	
16			61			

における用例は、特に用例数が多い『栄花物語』などと比較してみると、異なる様相を呈している。即ち、『源氏物語』では庭園及び自然（七例）が人物（四例）より多いのである。

要するに、「庭園」を「絵」に見立てることは、平安仮名文学において『源氏物語』から始まり、また、『源氏物語』におけるその用例数は（数として多いとは言いがたいものの）他の作品より、際立っている。その原因は何だろう。漢文学から強く影響を受けた『源氏物語』は、この点に関しても、中国からの影響が見られるということだろうか。本稿では、先行論ではほとんど問題視されてこなかった上記のような視座から、まず第一節で、唐代までの中国文学における「絵」と関連づけられる表現のあり様を整理した上で、『源氏物語』への影響の有無を検討する。第二節では、『源氏物語』における「絵」と関連づけられる「庭園」のあり様と特異性を確認しつつ、絵画関連の資料と照らし合わせることで、「絵」と「庭園」の関係性を捉えてみたい。

一　中国経典類及び詩賦における「絵」と関連づけられる物事

1　中国経典類及び詩賦における「絵」と関連づけられる表現の変遷

唐代までの経典類及び詩賦における「絵」と関連づけられる表現としては、**表2**に示した通り、[3]「まるで絵のようだ」「まるで絵の中

表2　唐代までの中国文学における「絵」と関連づけられる物事

庭園	風景	その他	人 男	人 女	計	時代区分	総数	
	5		2	3	10	唐以前	34	「如画」
	23		1		24	唐		
	1				1	唐以前	10	「似画」
?1	7	1（竹）		1	9	唐		
					0	唐以前	17	「入画」
	9	5（蓮・鴛鴦・鴛鴦・鷺・馬）	2	1	17	唐		
					0	唐以前	11	「堪画」
	4	5（牡丹・荔枝・鷺・虹・船）	1	1	11	唐		
	6		2	3	11	唐以前	72	合計
	43	11	4	3	61	唐		

に入ったようだ」といった意味の「如画」「似画」「入画」が挙げられ、また「絵に描くべし」といった意味の「堪画」も見られる。ちなみに、両者の使い分けについて、浅見［二〇〇八］は、「中晩唐期にはより能動的主体的な視点から風景を絵画に関連付ける傾向が見られる。この時期の詩に多用される「堪画」という表現はそのような傾向を示すものと考えられる」と指摘している。つまり、「如画」「似画」「入画」（「絵にようだ」）という受動的な鑑賞から、能動的な「堪画」（「絵に描くべきだ」）という変遷が見られる。なお、後掲の本文⑧⑨⑪において、「画図」という表現が見られる。しかし、調べた限りでは、「如画」（「絵にようだ」）を意味する「如図画」という表現は確認できず、代わりに「如画」を意味する「如図画」が宋代以降の宋詞に見られる。そのゆえ、ここでは、まず、意味が類似している「如画」・「似画」・「入画」などの変遷のありようを時代順に見てみよう。

唐の時代に至るまでは、全部で凡そ十一例が確認できる。ちなみに、初出例は以下の男性の顔に注目した用例①である。用例数が少ないにもかかわらず、比喩の対象は、人物の場合は男性から女性まで、また風景については山から樹、楼閣まで、多様だと言えよう。

男性　顔　①為レ人明須髪。眉目**如**レ**畫**。

（『後漢書』巻二四・馬援列傳）

②遙光美風姿。眉目**如**レ**畫**。髪鬢若二點漆一。

（『金樓子』巻四・説レ蕃）

女性　顔　③色如二桃花一。口如二含丹一。肌膚充澤。眉鬢**如**レ**畫**。

（『神仙傳』巻四・太陽女）

④其姉字惠芳。面目燦**如**レ**畫**。

（『玉台新詠』・巻二・左思・嬌女詩）

景色　山　⑤水至二清照一。衆山倒レ影。窺レ之**如**レ**畫**。

（『水經註』巻四十・漸江水）

林　⑥楓林曖**似**レ**畫**。沙岸淨如レ掃。

（『芸文類聚』巻二十八・王僧孺・至二牛渚一憶二魏少英一詩）

楼閣　⑦連閣翻**如**レ**畫**。圖雲更似レ真。

（『芸文類聚』巻七十六・庾肩吾・和二太子重雲殿受戒一詩）

また、唐においては、用例数が多少増加しており、比喩の対象は城、湖、川、山の苔、松、鴛鴦などに広まっているように見えるが、風景の山水に注目が集まっている傾向が見える。一方、人物に関する用例は少ない。例えば、「如画」では一例しかない。しかも、その一例（⑫）は、本文①～④のような容貌ではなく、「大徳」のもつ雰囲気をあらわす。

景色　城　⑧九天開出二一成都一。萬戸千門**入**二**畫圖**一。

（『全唐詩』巻一六七・李白・上皇西巡南京歌　十首之二）

湖　⑨湖上春來**似**二**畫圖**一。亂峰圍繞水平鋪。

（『白氏文集』巻五十三・二三三一・春題二湖上一）

松　⑩澗遠松**如**レ**畫**。洲平水似レ鋪。

（『白氏文集』巻五十六・二六五一・和三

微之春日投簡陽明洞天　五十韻）

鴛鴦　⑪翡翠交妝鏡。鴛鴦**入畫圖**。

（『全唐詩』巻六八五・吳融・即席十韻）

僧　大徳　⑫當時可愛**人如畫**。今日相逢鬢已雕。

（『全唐詩』巻六九八・韋莊・東林寺再遇僧益大徳）

以上から見れば、唐代までの経典類及び詩賦における「如画」「似画」については、唐以前と以後において人物から風景へ、男性から女性への変遷が見えてきた。板倉［二〇〇七］は、「中国絵画史の展開を巨視的に見れば、八世紀、中唐までは着色、人物画の時代と見なすことができ」、それ以降、山水画が主要なジャンルになっていく傾向があると指摘している。つまり、中国絵画には、特に顕著な傾向として人物画から山水画への変遷が見られる。そのためか、唐代の詩人たちが目の前の自然風景から山水画を連想する傾向があると考えられる。また、中国経典類及び詩賦における「絵」に関連づけられる表現は、中国絵画の変遷と一致しているようにみえる。要するに、両者には緊密な関係が窺えるのである。

対照的に、平安時代の仮名文学においては、**表1**のように、行事・人事関係の人物に関する用例が一方的に集中しているように見える。庭園はおろか、自然への注目度も低いと言えよう。こうした日中の相違点は興味深いが、その比較研究は今後の課題にしたい。

2　「庭園」への比喩に関して

唐代までの中国文学においては、庭園を絵画に見立てる微妙な例がわずか一例ながら見いだされる。次の⑬である。

⑬公府有高政。新齋池上開。再吟佳句後。一**似畫圖**來。結構疏林下。夤緣曲岸隈。綠波穿戶牖。碧甃疊瓊瑰。幽異當軒滿。清光繞砌迴。潭心澄晚鏡。渠口起晴雷。瑤草緣堤種。松煙上島栽。……

（『全唐詩』巻三六二・劉禹錫・白侍郎大尹自河南寄示池北新葺水齋。即事招賓。二十四韻。兼命同作）

劉禹錫の友人白居易は、洛陽履道里邸の庭園に新たに水齋を葺いた際、「府西池北、新葺水齋。即事。招賓偶題十六韻」（『白氏文集』巻五十八・二八七九）を詠み、劉禹錫に寄せた。劉禹錫は「再吟佳句後」、つまりその白詩を読んだ後で、「一似畫圖來」、即ちまるで庭園の様子を絵画に描いてみせてくれたかのように感じ取っている。ここで注目したいのは、劉禹錫が実際に見たのは庭園の絵画ではなくて、白居易の詩から想像した絵画であるということである。要するに、庭園→詩→絵画という順番で、絵に例えられることとなった。

白居易は中国では「造園の祖師」「造園祖師」と位置付けられ、陝西渭南下封縣東紫蘭村の「樂天南園」、江西廬山の「廬山草堂」、重慶忠州の「東波園」、洛陽履道坊の「池園」の四つの庭園を造営したばかりでなく、造園の心得を廬山草堂関係の「草堂記」、洛陽

履道坊関係の「池上篇及序」などの作品に記している。また、新間［二〇〇一］は、「白居易の庭園文学は兼明親王と慶滋保胤の二つの「池亭記」や鴨長明の「方丈記」、そして源氏物語に影響を与えている」とし、さらに「光源氏も若くから庭造りに執着しており、明石からの帰還後に六条院を造営した。六条院の描写と白居易の庭園文学の関わりが深い」と指摘している。とはいえ、本文⑬では、白居易の詩に描写されていた庭園を想像した上で、絵に例えられているのに対して、『源氏物語』においては、目の前の庭園をそのまま絵画に見立てている例ばかりである。そのため、本文⑬からの影響があるとは言えないだろう。

以上より、唐においても「庭園」を「絵画」に見立てることはほとんどなく、主に自然風景などの景色を絵に例える用例が多いことがわかってきた。実際には、宋になっても、同様に自然の景色を絵に例える表現が続けられている。(4)

＊

以上、中国における「絵」と関連づけられる表現のあり様を整理しつつ、『源氏物語』への影響の有無を検討してきた。「庭園」に関して「絵」と関連づけられる表現については、中国の文学から『源氏物語』へと影響した可能性はないと思われる。そもそも、『源氏物語』における「絵」と関連づけられる表現において、相対的には「庭園」への注目度が高いということに関しては、作者自身が絵画に深い関心を寄せていたということがあったのかもしれない。『源氏物語』において、確かに「絵」は重要な役割を果たしている。たとえば、作者は前代未聞の「絵合」という宮廷行事を設定した。この「絵合」で、光源氏は権中納言との争いに勝利し、権力・栄華の頂上へと近づく契機とした。ただし、「絵」と「庭園」の関係性をどのように捉えるべきかが問われる。

他方、平安時代において、寝殿造の発展とともに、室内の屏風などに描かれる絵（唐絵→やまと絵）も、室外の庭園（平安以前の百済・唐の影響を受けた庭園から寝殿造の庭園まで）もそれぞれ進化していた。「絵」と「庭園」の関係といえば、国宝『源氏物語絵巻』、『年中行事絵巻』（住吉本）などのやまと絵からは、当時の庭園の様子が窺えるが、いずれも平安後期の作例である。一方、平安前期・中期の「絵」と「庭園」の関係に関しては、両者とも現存する作例がきわめて少ない。これらについて、文学や文献資料を使って探究することは果たして可能だろうか。

次節では、『源氏物語』における「絵」と関連づけられる「庭園」の有り様と特異性を確認しつつ、絵画関連の資料と照らし合わせることで、「絵」と「庭園」の関係性を捉えてみたい。

二　『源氏物語』において「絵」に関連づけられる庭園

『源氏物語』の中で庭園に言及する箇所は七十以上に及ぶが、絵

に見立てられる庭園は全部で五箇所であり、いずれも光源氏にゆかりのある場であった。即ち、二条院（「夕顔」「若紫」）、須磨の住居（「須磨」）、六条院（「胡蝶」）の正編四例、また「総角」に見られる続編一例（二条院か六条院かは不審）である。一方、同じ庭園であっても、どのような場合に「絵」に例えられているか。それらの例を検討してみると、登場人物による庭園の捉え方が重要である。特に正編では、「絵」に見立てられる庭園それ自体がある登場人物の視線によって初めて捉えられたものとなっている。以下では、「絵」に例えられている庭園の主要な要素に注目しながら分析を行う。最後に、異なる表現に関する例について、「絵」に見立てるのではなく、「絵」と関連付けられる一例として視野に入れて考察する。

1　ある人物の視線により初めて捉えられた庭園（正編、四例）

(1)　二条院における秋の前栽、紅葉

⑭夕暮の静かなるに、空のけしきいとあはれに、御前の前栽枯れ枯れに、虫の音も鳴きかれて、紅葉のやうやう色づくほど、**絵に描きたるやうに**おもしろきを見わたして、心より外にをかしきまじらひかなと、かの夕顔の宿を思ひ出づるも恥づかし。

（「夕顔」①一八七頁）

本文⑭は夕顔が亡くなった後、二条院に移ってきていた右近が初めてとらえた二条院の景色である。秋の代表的な景物というべき「夕暮」、「紅葉」、「虫の音」などを一枚の絵に収めたかのように感じとっている。

⑮東の対に渡りたまへるに、たち出でて、庭の木立、池の方などのぞきたまへば、霜枯れの前栽**絵にかけるやうに**おもしろくて、見も知らぬ四位五位ときまぜに、隙なう出で入りつつ、げにをかしき所かなと思す。

（「若紫」①二五八頁）

⑮は、秋、二条院に移った紫の君がとらえた二条院である。源氏のいない間、初めて邸のあちこちを見渡してみると、庭も池も前栽も絵に描いたように風情があると受けとめられた。さらに、見たこともない黒い袍の四位、緋色の袍の五位の官人たちが混じって出入りしている様も見えて、素敵な邸だと感心している。ここで紫の君が感動していた対象は、実際に本文⑭において右近が初めて二条院の景色を見た時の感動と近いものがあろう。

ここでまず、絵画資料における紅葉について確認してみよう。やまと絵における紅葉は家永［一九九八］が以下のようにまとめている。

山又は野を男又は女、又男女が乗馬、車、又は徒歩にて過ぐる情景を描いたものがある。秋花見等と同じ型式の紅葉見の構図である。……以上が主として山野における紅葉の図であるのに対して、……又水辺の紅葉を主題としたものも頻る多い。……最後に稍異色ある図様を一括して考えてみるに、第一に月下の紅葉である。……第二に……時雨下の紅葉を描いたもの、……第三は……雪下の紅葉……

傍線部のように山野、水辺、月下、時雨との組み合わせがよく見られるという。しかし、日本文学Web図書館の「和歌・連歌・俳諧ライブラリー」を利用し、関連表現を検索してみたところ、絵に描かれた庭にある前栽、紅葉を示す例は長能の一首しかない。

⑯　同じ院（筆者注：花山院）の、御手づから紙絵を描き給て、人々に歌つけさせ給しに、秋の前栽咲き乱れた、紅葉おもしろき所

佐保姫の玉落ちにけり唐錦織れる梢の上の白露

（『長能集』八〇）

⑯の詞書は、本文⑭と比べると、□で囲んだ「絵」、「前栽」、「紅葉」、「おもしろき」という文言が一致している。また、紫式部の父である為時は、花山院の東宮時代の侍読であり、花山院が即位した際には、長能と同時に六位蔵人に任じられている。これらの点から、本文⑯の場面では、花山院の絵からの影響も十分考えられるだろう。

次に、前栽について検討する。飛田［二〇一一a］は、『源氏物語』における前栽を網羅的に調べた上で、前栽が四季を通じて楽しめる植物であることを示している。一方⑭、⑮（さらには後掲の⑲も）では、なぜかいずれも秋の前栽をとらえた上で絵に見立てられている。

一方、物語ではなく実際に制作された屏風歌の場合はどうかというと、屏風歌全般を調査した田島［二〇〇七］では、「前栽」という検索項目は立てておらず、その代わりに「前栽植」という項目が立てられている。その研究成果に拠りつつ屏風絵における秋の前栽の例をまとめてみると、注目すべきは、**表3**のように取り上げられている「前栽植」の季節が全て秋であること、さらには歌人たちが貫之以外、花山院及び一条天皇文化圏に近いという点である。つまり、四季の前栽を絵に見立てる場合、前栽に関わる絵の影響があったがゆえに、『源氏物語』では、本文⑭⑮⑲のように秋に設定された可能性があると考えられる。

(2)　春、「唐めいた」る「竹編める垣」、そして「石の階、松の柱」

⑰住まひたまへるさま、言はむ方なく唐めいたり。所のさま**絵に描きたらむやう**なるに、竹編める垣しわたして、石の階、松の柱、おろそかなるものからめづらかにをかし。

（「須磨」②二一三頁）

これは宰相中将（かつての頭中将）の目から見た須磨の源氏の住まいである。通常の都の内であれば、藤原摂関家の後継者である中将が源氏の邸から「絵のようなところだ」という感動をおぼえることはなかなかないだろう。しかし、須磨では、「唐」の雰囲気の意外さゆえに感動を覚えたということであろう。

本文⑰の「唐めいた」る「竹編める垣」、「石の階」、「柱」、が白詩「香爐峰下新卜二山居一草堂初成偶題二東壁一」（『白氏文集』巻十六・九七五）の「石堦桂柱竹編墻」からの引用であることは一目瞭然である。

絵からみると、『源氏物語』以前の唐絵との関連性は見えるのだ

表３　屏風絵における秋の前栽

作者	詞　　書	和　　歌
貫之	**八月**、人々あまた人の家の花を折る、堀り植うる所	皆人もなき宿れなれば色ごとにほかへ移ろふ花にぞありける
	秋の花ども植ゑたる所	言わひつつ植ゑたる宿の花なれば思ふがごとの色濃かりけり
元輔		**秋**の夜の花堀り植ゑて長き夜の露の心を知らむとぞ思ふ
	八月十五夜、前栽植ゑたる所	いざ今日は千種の花を添へて見む露にも月に影宿るなり
	八月十五夜、前栽植ゑたる所	今年より植ゑ始めたる我が宿の花をいづれの**秋**か見ざらむ
中務	前栽植ふる家	露をだに落とさで掘りつ女郎花植ゑばいづれの**秋**か見ざらむ
能宣	同じ所に人々の家あり、前栽のもとに人々など居て侍るに	**女郎花**匂ふあたりにむつるればあやなく露や心置くらん
	嵯峨野に前栽掘りに、蔵人所の人々など罷りて侍りしに	**秋**ごとに大宮人の来る野辺は嵯峨野のことや花も見るらん
輔尹	ある所に前栽掘るに	**秋**さらに君まづみよと野辺に出で目にたつ花を折りてこそくれ
赤染衛門	京極殿の御障子の絵に、前栽植ゑさせて、男女のみたる所に殿の御前仰せられし	掘り植うる草葉の虫の音を添へて千代の**秋**まで声を聞かせん
	とて、又詠めと仰せられしに	花を見し野辺に心をやりつれば宿にて千代の**秋**は経ぬべし

ろうか。この白詩の題と初句「五架三間新**草堂**」に示された通り、これは「草堂」に関する描写である。実際、唐代の盧鴻（『宣和画譜』に収録）によって、草堂が絵画として描かれて以来、山水画の一部分として描き続けられている。彼の『草堂十志図』は歴代に模写されてきた。例えば、北京故宮博物館所蔵の唐代模写、台北故宮博物館所蔵の南宋模写、個人蔵の清代模写などであり、そのうちの一つが大阪市立美術館（北宋・伝李公麟臨）に所蔵されている。そして、「草堂図」関連の作品（例えば、明・文伯仁『南溪草堂図』、明・唐寅『西山草堂図』）からも確認されるように、本文⑰に挙げられている「垣」、「石の階」、「柱」は単なる白詩の引用というだけではなく、正に草堂図として一般的に描かれている要素でもある。さらに、東寺旧蔵の『山水屏風』から、草堂図が日本に伝来・受容されていることが裏付けられると思われる。

(3)　春、立石

⑱竜頭鷁首を、唐の装ひにことごとしうしつらひて、……まことの知らぬ国に来たらむ心地して、あはれにおもしろく、見ならはぬ女房などは思ふ。中島の入江の岩蔭にさし寄せて見れば、はかなき石のたたずまひも、ただ**絵に描いたらむやうなり**。

（「胡蝶」③一六六頁）

⑱は中宮づきの女房たちの視線から初めてみた六条院の東南の町の春の庭の景色を説明している。中宮づきの女房は内裏に出入りしており、数々の素晴らしい景色を見てきたはずだが、六条院の春景色に感動し、「見知らぬ国」に来たような心地がしたという。特に、さりげない立石の風情もまるで絵にかいたようだと語られている。

ここで注意すべき点は、「絵に描いたらむやう」とされているのが、唐風の装飾、装束その他というよりも、「石のたたずまひ」である点である。ここの立石は、恐らく「太湖石」のようなものを指していると考えられる。飛田［二〇一一b］は「奈良・平安・鎌倉時代の絵画にも、太湖石らしいものが見られることはあまり知られていない」と指摘している。また管見の限り、大和絵に関連する資料においても、「太湖石」はおろか、「立石」さえ用例は見当たらない。一方、正倉院所蔵の紅牙撥鏤尺第四号の裏には、六条院のような豪華な庭ではないものの、庭に立てられた立石（太湖石）が描かれている。また、中国に目を向けると、九世紀後半の唐・孫位の「七賢図」（上海博物館蔵）にも、竹林七賢が太湖石の前で談笑している姿が描かれている。さらに、『宣和画譜』巻十「山水叙論」において、「松峰泉石図」（項容作）、「松石図」（畢宏作）など「石」に関連する絵画がいくつか列挙されている。これらのことから、「石」を絵画の題材にするのは中国の伝統的な要素であることがわかってきた。紫式部は、このような中国から伝来した絵画あるいは絵画資料を参照にして、「立石」に注目したのではないかと推測できるだろう。

さらに、この「立石」が庭園づくりにおいて果たす役割にも関連があると考えられる。

『作庭記』では、石を立てることについて、その選び方、組み合わせ方、配置の仕方、などが細々と説明されており、その重要さを示す一方、冒頭では「家主の意趣を心にかけて、……してたつべき也」と強調されている。史実の例では、倉田［二〇一八］によると、高陽院の立石は頼通のプランである可能性が高いという。即ち、立石は作庭の根幹であり、家主の意趣に関わっている。そのようなことから、本文⑱では、何よりも「石のたたずまひ」が褒められており、絵に例えられているのではないか。つまり、「立石」を褒めることは、六条院の「東南の町」を造営させた光源氏の意趣を称賛することになるだろう。

以上の⑭⑮⑰⑱の四例から、「絵に描きたるやう」な庭園はある登場人物が初めてとらえた庭園であることが確認されるとともに、それぞれやまと絵、もしくは唐絵からの影響が見て取れる。なお、佐藤ほか［一九九一］は、「若い頃の光源氏の頻繁な忍び歩き」の影響で、「夜の庭園の記述の件数が圧倒的に多」いと指摘している。一方、「絵に描きたるやう」な庭園は、⑭の右近が夕暮時、⑮の紫の君が昼間、⑱の中宮付きの女房も昼間（なお⑰の宰相中将は不詳）に見たものであり、いずれも恋の場所として用いられる庭園ではない。

2　秋の「遣り水にすめる月の影」がある庭園（続編、一例）

次に、続編中の「総角」の巻にみえる特徴的な例をみてゆく。

⑲紛るることなくあらまほしき御住まひに、御前の前栽ほかのには似ず、同じき花の姿も、木草のなびきざまもことに見なされて、遣水にすめる月の影さへ**絵に描きたるやうなるに**、思ひつるもしるく起きおはしましけり。（「総角」⑤二五九頁）

この本文⑲では、秋の八月に薫から見た、匂宮の住まいの様子が語られている。それは、よそと違って、絵に描いたような印象を受けたという。しかし、薫と匂宮の関係を考えれば、薫はよく匂宮の曹司を訪ねていたはずである。[5] たとえば、「橋姫」の巻で、薫が宇治の八の宮の家を訪ねた折、八の宮から自分の死後の姫君たちに関する後事を委託されるということがあった。その後、帰京した薫のことが次のように語られている。

⑳三の宮の、かやうに奥まりたらむあたりの見まさりせんこそをかしかるべけれと、あらましごとにだにのたまふものを、聞こえはげまして、御心騒がしたてまつらんと思して、のどやかなる夕暮に参りたまへり。（「橋姫」⑤一五三頁）

匂宮に八の宮の姫君が素晴らしいと伝え、その好色心を煽り立てようと思って、傍線部のように薫は静かな夕暮れに匂宮のもとに行った。そこで、二人はいろいろと話を交わしたようだが、ここでは庭園の景に対して、特に言及がない。なぜ以前には⑲のような感動がなかったのだろうか。また、薫が魅了された「絵に描きたる」ような素晴らしい点とは何だろう。

ここで、「絵」にたとえられているのは庭園にある「遣水」と「秋の月」である。「絵」に描かれる水とそこに映る月光という絵画の観点から、家永［一九九八］と田島［二〇〇七］の示している用例を調べると、「泉」「釣り殿」「池のほとり」などの水域も見出される。例えば、「石清水深き心はまさらじを羨ましくも映る月影」（『元輔集』前一五三）などである。つまり、やまと絵において、「水」と「月影」の組み合わせは一般的な描写であり、特に新鮮味がないように見受けられる。

続いて、『源氏物語』に目を転じて、それぞれの用例を調べてみると、「遣水」が十七例あり、「月（の）影」が二十四例確認できる。そのうち、「遣水」と「月」の組み合わせは僅か三例である。

一例目は、七月の月の夜に、明石の入道が、光源氏の帰京のことを知った後で、悲嘆のあげく、遣水に落ちた滑稽な場面である。

㉑弟子どもにあはめられて、月夜に出でて行道するものは、**遣水**に倒れ入りにけり。（「明石」②二七一頁）

二例目は、夕霧から見た、落葉宮の本邸の様子である。

㉒いとどうちあばれて、未申の方の崩れたるを見入るれば、はるばるとおろしこめて、人影も見えず、月のみ**遣水**の面をあらはにすみましたるに、大納言ここにて遊びなどしたまうしをりをりを、思ひ出でたまふ。（「夕霧」④四五二頁）

築地の崩れから邸内をのぞいてみると、人影もみえず、三月の月影

ばかりが遣水の面をみせる。荒涼とした場所の「遣水」と「月」は風情があるが、「悲しい」感情を喚起させる。

そして三例目が当該場面（⑲）である。ここは、薫が匂宮に中の君との結婚を提案しようとする場面である。薫がそのように決心をしたあとなので、慣れ親しんだ風景も異なるように見え、新鮮味を感じたということが想像されよう。即ち、薫の心情の変化とその結果としての風景の新鮮さが描写されている。この用例は、先述の正編における人物の視線により初めて捉えられた庭園とは異なり、見慣れた風景であっても心情によって感想が異なっているということを示しているだろう。さらに、作者は庭園を絵に見立てるというメタファーを通して、作中人物の心情をより鮮明に伝えるとともに、読み手に単なる文字や言葉では伝えきれない感情の深さや場面の特別さを感じさせているだろう。

3　他と表現が異なる絵と関連づけられる庭園（一例）

以上の五例は、「絵に描きたるやう」という表現によって絵に見立てられる庭園である。最後の一例は、絵と関連づけられるが、定型の表現とは異なっている。

㉓所のさまをばさらにもいはず、作りなしたる心ばへ、木立、立石、前栽などのありさま、えもいはぬ入江の水など、**絵に描かば、心のいたり少なからん絵師は描き及ぶまじと見ゆ**。月ごろの御住まひよりは、こよなく明らかになつかし。御しつらひなどえならずして、住まひけるさまなど、げに都のやむごとなき所どころに異ならず、艶にまばゆきさまはまさりざまにぞみゆる。

（「明石」②二三四頁～二三五頁）

これは春、光源氏が初めて見た明石入道の豪華な屋敷でもあり、その後に自らが住まう場所でもある。光源氏は、建築の造作に見える風情、即ち「木立、立石、前栽、入江の水」など[6]について、上手な絵師でなければ、描けないだろうと見ている。また京の都の高貴な邸とは変わるところなく、むしろ立ち勝っているように感じている。

ここでは、先述の五例とは表現が異なる。「絵に描かば」は絵に描くことを想像するものの、完成した絵は未だ存在しない。しかし、他の用例では、「絵に描きたるやう」というように、完成した絵があることを前提とした表現となっている。なぜこのような使い分けがなされるのだろうか。

それは、同じように初めて（本文⑲の薫以外）見た庭園であっても、光源氏が明石入道の屋敷から受けた印象の要点が異なるからであろう。各本文の波線に示したように、右近が「心よりほかにをかしきまじらひかな」（本文⑭）、紫の君が「見も知らぬ」（本文⑮）、宰相中将が「言はむ方なく」（本文⑰）、秋好中宮付きの女房が「まことの知らぬ国に来たらむ心地」（本文⑱）、薫が「あらまほしき御住まひ」（本文⑲）といったように感じている。彼らにとっては、今まで見たこともないような圧倒される感じがしているようである。

一方の㉓では、光源氏が「なつかし」と感じている。つまり、光源氏にとっては理解できる風景でもある。ただし、ここでの光源氏は絵師の技量を気にしているといえるだろう

『源氏物語』における「絵師」は五例数えられる。先の㉓以外では、❶「いみじき絵師といへども、筆限りありければ」ということで、「絵に描ける楊貴妃の容貌は」「いとにほひすくなし」（「桐壺」①三五頁）と語られている、筆に限りがある絵師、❷王昭君物語に出た賄賂を受け取るような「黄金求むる絵師」（「宿木」⑤四四九頁）、さらに、❸「その工匠も絵師も、いかでか心にはかなふべきわざならん」（「宿木」⑤四四九頁）と述べられるように、薫の要求を満たせそうもない絵師、そして最後は、❹薫と匂宮の浮舟をめぐる争いに巻き込まれた「御随身どもの中にある、睦ましき殿人などを選りて、さすがにわざとなむせさせたまふ」「絵師ども」（「浮舟」⑥一六二頁）、これらの四例が語られている。❺本文㉓は「心のいたり少な」い絵師への心配を表している。以上の五例から、『源氏物語』における「絵師」は腕前や人柄においても限りがあると懸念される存在であることが示唆されている。専門職の絵師と比較すれば、須磨の絵日記を描いたアマチュアの絵師ともいいうる光源氏は、腕前にしても、人柄にしても、かえって先述のような懸念が一切ないように見受けられる。

結び

以上のように、「絵」と関連づけられる表現に注目して、庭園、絵画、文学が複雑に交わり合い、『源氏物語』がどのようにして多様な表現を生み出しているかを検討してきた。まず、中国文学（特に唐詩）及び日本平安仮名文学における用例と比較しながら、『源氏物語』における絵と関連づけられる庭園の特異性を明らかにした。即ち、「庭園」を「絵」に見立てることは、『源氏物語』から始まっている。また、「絵」と関連づけられる表現については、中国の文学から『源氏物語』へと影響した可能性はないと思われる。

また、『源氏物語』において「絵」に見立てられる庭園そのものに焦点を当ててみた。『源氏物語』の中で庭園に言及する箇所は七十以上あるが、絵に見立てられる庭園は主にある登場人物が初めて捉えた庭園であり、光源氏にゆかりのある場であった。また、特に春（⑰⑱㉑）と秋（⑭⑮⑲）の季節に限定されている。さらに、見慣れた風景であっても、絵に見立てられることを通して、登場人物（⑲）の心情の変化が表現されている。絵画資料との照らし合わせから、花山院の絵、屏風絵、さらに中国の草堂図からの影響の可能性がみられる。一方、庭園に配置された立石は主人である光源氏の造園に関する意趣を反映したものとして重視されたようである。

日本における文学と絵画の関係といえば、まず文学作品に基づい

た絵画、つまり、文学から絵画への影響が挙げられる。例えば、枚挙に暇がないほどの源氏絵は、貴族社会の繊細な美意識や情感を視覚的に伝え、読者に物語の深層を味わわせる。その一方で、絵画から文学への影響関係を確認することには難しい面がある。特に、平安時代までの現存するやまと絵が非常に少ない。本稿では、現存する中国絵画及び日本の文献資料の検討を通じて、絵画から『源氏物語』への影響を確認してきた。これらの用例から、「庭園」をめぐる絵画と文学との相互的な影響関係も見えてきた。今後も、絵画資料そのものと文学表現との関係について探究を試みたい。

※中国漢文・漢詩の引用本文は基本的に中華書局版による。ただし、『白氏文集』の引用は『新釈漢文大系』（明治書院）により、花房英樹による作品番号を付した。『源氏物語』の引用は『新編日本古典文学全集』により、巻名・巻数・頁数を示した。また『源氏物語』内の用例の検索は『源氏物語大成索引篇』の関連の項目による。『長能集』『元輔集』の引用は『新編私家集大成』（日本文学 Web 図書館所収）により、適宜表記などを改めた。

注

（1）本稿において確認した「絵」と関連づけられる表現は計八三例あり、以下の三種類に分類される。イ「絵に描きたるやう」などの表現が五三例、ロ「絵に描かまほし」などの表現が一九例、ハ「絵に描くとも筆も及ぶまじ」、「絵に描くとも常なりや」、「絵にも描きとどめがたからんこそ口惜しけれ」などの表現が九例である。**表1**は拙稿（楊［二〇二二］）によった。ただし、その拙稿にも述べた通り、紙幅の都合で「絵に描きたるやう」と「絵に描かまほし」などの表現を検討の対象としたが、「絵に描くとも筆も及ぶまじ」といった九例については、取りあげなかった。一方、本稿では、**表1**を作成する際に、「絵に描くとも筆も及ぶまじ」といった九例も数に加えているため、先述の拙稿とは若干数値が異なる。

なお、この九例の内訳は以下の通りである。散文学の『源氏物語』では二例で庭園一例、人物一例、『栄花物語』では人物一例、『更級日記』では自然一例、『夜の寝覚』では人物一例、『狭衣日記』では人物一例、『とりかへばや』では人物二例、その他、韻文学の『久安百首』自然一例が確認された。

加えて、**表1**の「人物など」の「など」について説明する。例えば、『栄花物語』で、三条院崩御後、人々が着用している喪服について、「御衣の色も、冬になるままにいとどさし重なり、色濃きさまにさまざまおはしますを、この御さまを**絵にかかばや**と、あはれに見えさせたまふ」（「ゆふしで」②一一三頁）と記されている。冬になるにつれて、喪服が重ねられ、色が濃く見える様子が描かれている。ここで絵に描きたいのは、人物よりも喪服のあり様である。しかし、喪服は人物が着ているものであるため、「人物など」として表示した。

（2）和文学において、平安以前では一例しか見出されなかった。それは『万葉集』の「我が妻も　絵に描き取らむ　暇もが　旅行く　我は見つつ偲はむ」（巻第二十・四三二七）である。

（3）中国古典の検索については、漢文の検索は【中國哲學書電子化計劃】https://ctext.org/zh によるとともに、特に唐詩の検索にあたっては【全唐詩検索系統】http://cls.lib.ntu.edu.tw/tang/tangats/Tang_ATS2012/SrchMain.aspx により、さらに【搜韻】https://www.sou-yun.cn をも参考にした。検索にあたり、曖昧な用例については、筆者独自の判断で抽出しているため、数値は厳密なものとは言いがたいだろう。ただし、全体のおよその傾向はこれらの数値によって示されているものと考える。

（4）なお、北宋の一〇五〇年前後、漸く以下のような庭園を絵に例える用例が現れた。

茅檐亦自好。吾廬四如畫。

（『元豐類稿』巻三・曾鞏・青青間二青青）

（5）「総角」巻の当該箇所における匂宮の住まいについては、新編日本古典文学全集の頭注に「匂宮は二条院に住み、六条院とはやや遠く、不審。匂宮の曹司が六条院にあるとの説もある」と指摘されている通り、二条院か六条院かは確定されていない。つまり、薫が六条院に居て、しかも「近くては常に参りたまふ」（「総角」⑤二五九頁）とあるので、六条院内の匂宮の曹司の可能性もありうる。とはいえ、「総角」の例（⑲）は匂宮の住まいについて述べているので、実際は二条院とみるべきであろう。

（6）また、管見では、「入江の水」と関連づけられる絵への言及は『源氏物語』にしか見えないようである。『源氏物語』における「入江」は全部で四例である。庭園にある「入江」は春の六条院（本文⑱）と春の光源氏の明石の邸（本文㉓）だけに描写されており（残りの二例は明石にある海辺の入江）、しかも、「立石」とともに、絵と関連づけられている。

引用文献

浅見洋二［二〇〇八］「中晩唐詩における風景と絵画」『中国の詩学認識――中世から近世への転換――』創文社（初出・一九九二年）

家永三郎［一九九八］『上代倭絵全史　改訂重版』名著刊行会

板倉聖哲［二〇〇七］「絵画」『別冊太陽　台北故宮博物院』平凡社

倉田　実［二〇一八］「再建「高陽院」について」『庭園思想と平安文学　寝殿造から』花鳥社

佐藤昌啓・田中淳二・波多野礼子［一九九一］「「源氏物語」の庭園」須藤弘敏（編）『文化史研究支援「源氏物語」語彙データベース報告書　第2集』弘前大学　人文学部日本文化論研究室

新間一美［二〇〇一］「白居易文学と源氏物語の庭園について」『白居易研究年報』二

田島智子［二〇〇七］『屏風歌の研究　資料篇』和泉書院

飛田範夫［二〇一一a］「平安時代の前栽について」『平安時代庭園の研究』国立文化財機構奈良文化財研究所

飛田範夫［二〇一一b］「中国と日本の古代絵画の太湖石」『長岡造形大学研究紀要』九

楊　卓婧［二〇二二］「平安仮名文学における「絵に描きたるやう」と「絵に描かまほし」」『WASEDA RILAS JOURNAL』十　早稲田大学総合人文科学研究センター